

菊を活用したテーブルコーディネートと動画制作 —地域貢献としてのコロナ禍における余剰菊の教育利用—

Table Settings and Video Production Using Chrysanthemums:
Educational Use of Surplus Flowers as Philanthropy during the Novel Coronavirus Pandemic

谷口 泉, 中野愛子, 中村麻理, 小橋一秀, 長谷川 聡

Izumi TANIGUCHI, Aiko NAKANO, Mari NAKAMURA, Kazuhide KOBASHI, Satoshi HASEGAWA

要旨：名古屋文理大学のフードビジネス学科「フードコーディネート実習」および情報メディア学科「情報メディア論」の授業で、菊を活用した実習を実施した。2020年コロナ禍の緊急事態宣言下で出荷不振となった菊4000本余りを譲り受けたもので、教育素材として有用な活用であっただけでなく、社会貢献や地域社会の持続性としての意味があり、教育的な活動となった。本稿で、この活動について報告し、花の教育利用の効果と可能性について考察する。

Abstract: University classes utilizing chrysanthemum were conducted in both the Department of Food Business and Department of Information and Media Studies at Nagoya Bunri University. Because of the Coronavirus (COVID-19) pandemic, the Japanese government declared a state of emergency in 2020. As a result, farmers have been hit hard financially. Nagoya Bunri University acquired 4,000 cut chrysanthemum flowers from farmers to contribute to the local community. In this paper, we report the contents of our activities and explore the possibility of using flowers in educations.

キーワード：新型コロナ, テーブルコーディネート, 菊, タブレット端末, 動画

Keywords: Novel Coronavirus, table setting, chrysanthemum, tablet terminals, short movie

1. はじめに

2020年、新型コロナウイルス(COVID-19)感染拡大によって日本でも緊急事態が宣言された。外出自粛期間においては多くの産業が経済活動の停滞を余儀なくされる中、イベントの中止も相次ぎ、花の需要が大幅に落ち込むこととなった。平成30年生産農業所得統計によれば、愛知県の農業産出額は、3,115億円で全国7位である。県内にトヨタ自動車の本社所在地である豊田市もあり、工業都市のイメージが強い愛知県であるが、実は農業も盛んな地域である。中でも花きの産出額は543億円と全国1位で、主な花きの産出額としては、菊216億円、洋ラン(鉢)55億円、花木類(鉢)53億円、観葉植物(鉢)41億円、バラ23億円、カーネーション17億円となっている。ちなみに、愛知県の菊の産出額は全国1位、その構成比は31.5%を占める^{注1)}。

新型コロナウイルス感染症の拡大が進む中、愛知県は「花き」と「つまもの」の生産者を対象とした経営支援策を打ち出した。2020年5月中旬から6月末までの期間、「花き」や「つまもの」の利活用を行った生産者に経済支援を行うという内容であった。ここで言う利活用は、ふだん花を使用していない施設で、装飾に用いることを想定していた^{注2)}。生産者の相談窓口は愛知県下の農業協同組合で、利活用先とのマッチングも農業協同組合が担った。

名古屋文理大学は以前から愛知県農業協同組合中央会との教育連携実績があった。具体的には、JA農産物直売所情報誌『フレ』の記事作成に2か年に渡って関わったことがある。2015年秋冬号では新タマネギとニンジンの圃場を訪ね、収穫体験をレポートした。翌年の2016年秋冬号では、特集記事「1日350g野菜を摂っています

か？」の作成に携わり、つまもの農家や農産物直売所のレポートに加え、野菜をふんだんに使用したレシピ提案を誌上で行った。

このような連携実績を背景に、愛知県農業協同組合中央会から名古屋文理大学に白菊の利活用の依頼があったのである。最初の連絡があったのは5月中だったため、対面授業再開後の6月中旬以降の授業において利活用する方向で、切り花4000本をお引き受けすることとなった。愛知県農業協同組合中央会から「葬式需要の高い白菊は、通常なら1本70円のところ、たった2円とか3円になりました。花は最終的に飾られるまでに、輸送、飾り付けなどのコストがかかります。それなら、出荷せずに産地で廃棄した方がコストがかかりません。産地廃棄はもったいないけど、産地廃棄を考えざるを得ませんでした」という話を聞き、本来美しく飾られるはずであった花を産地で廃棄することは、生産者の方々にとってあまりにも悲しいことであり、SDGsの観点からもぜひ名古屋文理大学でお引き受けしたいと回答し、今回報告するような教育における利活用を実施する運びとなった。

実際に花きの利活用を行ったのは次の2科目においてである。一つは、フードビジネス学科の科目である「フードコーディネート実習」における新たな菊の可能性を広げるコーディネート実習、もう一つは、情報メディア学科「情報メディア論」科目における映像制作体験である。いずれの授業も、新型コロナウイルス感染拡大防止対策として4月から実施した全面オンライン（遠隔）授業を経て2020年6月初旬から感染防止対策のもとで再開された対面授業で実施されたものであり、全学科で新生入生に無償配布しているiPadを活用している¹⁻⁴⁾。

続く第2節でフードビジネス学科「フードコーディネート実習」の事例について、第3節で情報メディア学科「情報メディア論」での利活用の実際と授業の効果について述べ、第4節以降で今回の地域貢献の意義と、教育効果について考察する。

2. フードビジネス学科「フードコーディネート実習」での活用

2.1 授業の概要

フードビジネス学科は日本フードコーディネーター協会のフードコーディネーター養成認定校であり、フードコーディネート実習は、フードコーディネーター3級取得のための必修科目である。実習内容については、各回、提示されたテーマとメニューでシチュエーションイメージを設定し、班で調理を行い、各々がシチュエーションイメージに合った器や小物を選びスタイリングし、料理写真を撮影している。さまざまなテーマでのスタイリングを実践することでフードコーディネーターに必要なフードスタイリング技法、食空間の演出力等を修得することを目標としている⁵⁾。フードビジネスの業界において、販促物に料理写真が多用されている。理由として、食品のおいしさは人間の感覚が複合的に働いて決定されるため、私たちが食べ物を選択する際に、感覚受容器における感受性の割合が、視覚87%、聴覚7%、触覚3%、嗅覚2%、味覚1%とされており、目から入ってくる情報（視覚情報）が最も重要であるとされている⁶⁾。近年のインターネット普及から食品や料理の写真を見て購入を決断するケースが増えているため、見た目でおいしさを表現する必要性はさらに高くなってきていると考える。今回は、「器と輪菊のスタイリング」をテーマに、食器または籠と輪菊を使用し実習を行った。

2.2 授業の様子

今回も通常の実習同様、まず4項目（季節（時間帯）、場所、対象者、コンセプト）を記入し、シチュエーションを設定する。次にイメージを具現化するため、表現したいスタイリングに近い写真を探し、小物の使い方、色の合わせ方、写真の構図など参考にしたいアイデアを集め、細部のイメージまで明確にした上でラフ図（概略図）を描く（図1）。次に器や小物を選び組み合わせ配

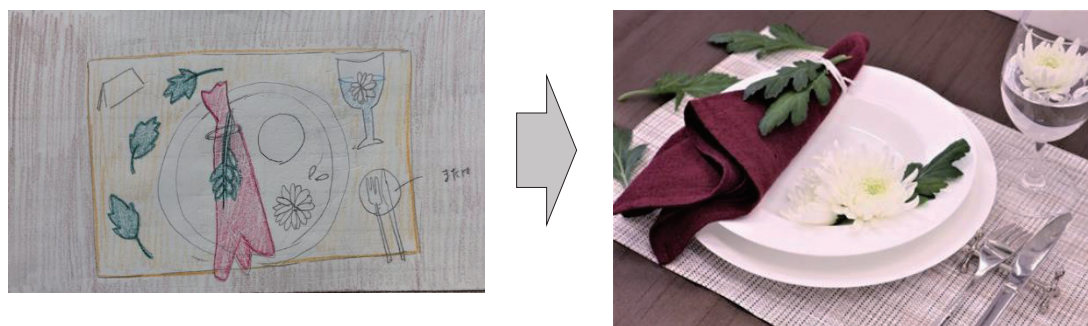


図1 ラフ図を元に制作したスタイリング写真

置する。最後に輪菊を添え、iPadで撮影を行う⁵⁾。当日は、美濃焼の器や竹・木製の籠等が並べられ、学生たちも輪菊をイメージに沿って長さの調節や、花びらや葉を散らして使用するなど、生花ならではのスタイリング作業を楽しんでいる様子がうかがえた(図2)。



(a) スタイリングしている様子



(b) iPadで撮影している様子

図2 フードコーディネート実習の様子

2.3「器と輪菊のスタイリング」学生作品

学生たちが制作した「器と輪菊のスタイリング」作品が図2である。学生が設定したシチュエーションイメージとスタイリングの要点について紹介する。

一作品目は、50～60代を対象に春先の高級和食店をイメージした作品。高級感を出すため、深みのある色を使用した器と箸を選んだ。布は紺色のみだと暗い感じになるため差し色にオレンジ色を追加した。また、上品さを強調するため一輪だけ菊を置くことで菊の花言葉「高貴」「高尚」「高潔」を表現することができた(図3a)。

二作品目は、大人の女性を対象に、夏の夜景を楽しめるオーベルジュをイメージした作品。菊には和の印象が

強いが、モダンでシックなテイストにしオシャレなディナー風の洋のスタイリングに仕上げた。全体的に白を基調としているが、差し色にワインレッドのナプキンを取り入れポイントにした。またグラスに菊を浮かせることで涼を表現し夏らしさを感じられる作品にした(図3b)。

三作品目は、働く女性を対象に、秋のお昼に古民家カフェで女子会ランチをイメージした作品。菊を目立たせるため小物の使用は控え、数人での食事がイメージできるように器を3枚使用しスペースを広く活用した配置にした。色合いもオレンジ色や赤茶色で統一し全体的にシンプルにまとめた。写真は真俯瞰から撮影することでスタイリング全体がわかる作品にした(図3c)。

四作品目は、主婦、60～80代夫婦を対象に、秋の落ち着いたカフェをイメージした作品。秋らしさを表現するため、レース柄とえんじ色、白色と薄茶色のチェック柄の布を重ね合わせ使用した。籠には菊をたくさん詰め込み華やかに表現した。籠とカトラリーは木製で統一し、可愛いらしさをプラスさせるため、リボンを周りに配置した。全体的にゆっくり落ち着けるナチュラルなテイストの作品に仕上げることができた(図3d)。

五作品目は女子大生を対象に、秋の中国茶会をイメージした作品。秋らしい落ち着いた深みのある色を基調とし、竹のランチョンマットをすだれに見立て、水を張っ



(a) 高級和食店をイメージした作品



(b) オーベルジュをイメージした作品



(c) 女子会をイメージした作品



(d) カフェをイメージした作品



(e) 中国茶会をイメージした作品

図3 器と輪菊を使用した学生作品

た器に菊を浮かべ、菓子切りを添えることで茶会を表現することができた (図3 e)。

2.4 授業の結果と成果

菊を提供していただき「フードコーディネート実習」において、初めて生花を使用した実習を行うことができた。生花を実習で用いる利点として、菊の長さの調節や、花びらや葉を切り離し自由なアレンジが可能になることが挙げられる。通常の実習では、植物は造花を使用していたため切ることができず差し込む等、活用パターンに制限があるため設定したシチュエーションイメージとの違いを最終的に調整する必要があった。しかし、生花の使用により造花では表現できなかった方法の選択肢が増えスタイリングの思考を深める内容になった。それに加え、植物のアレンジが可能になったことで設定したシチュエーションイメージにより近い仕上がりになり、設定を元に形にできた学生の達成感も大きいと考えられる。これらは学生のアンケート結果からも「花を使ったスタイリングは初めてでとても楽しかった」、「菊の花を使ったスタイリングは印象的だった」、「実習で菊を使ったことがなかったため、新鮮で楽しかった」といった意見があり、生花を使用したフードコーディネート実習を体験することは学生自身の表現の幅も広がり教育効果が大きいと思われる。

また菊は日本の国花であり、花言葉も「高貴」という意味を持つにも関わらず輪菊は、仏花のイメージが強いためハレの日での使用はあまりみない。しかし、今回の実習で学生らが考えるシチュエーションイメージは、ハレの日や日常での輪菊の使用用途が多数みられた。スタイリングのテイストについても、和だけでなく、洋風 (図3 b)、ナチュラル風 (図3 d)、中国風 (図3 e) など、さまざまなテイストで多角的に表現されていた。これらはシチュエーションイメージを設定した後、スタイリングを行うことで輪菊のさまざまな利用場面を明確にすることができた。この取り組みで制作した作品によって消費者に対し仏花の利用だけでなく、輪菊の具体的な新しい活用用途の提案に繋がることも期待できる。

3. 情報メディア学科「情報メディア論」映像制作体験

3.1 授業の概要

情報メディア学科の「情報メディア論」は1年次前期必修科目であり、今年度は新入生124人に再履修や他学科からの履修者を含めて合計130人余の受講者が、同一日の午前 (2限) と午後 (4限) の2クラスに分かれてどちらかで受講している。2つのクラスは同一教員が担当しており各クラスに1名ずつ上級生のSA (Student

Assistant) が配置してある。情報メディア学科では2年次になると学生は「情報システム」「映像メディア」「サウンド制作」「メディアプランニング」の4コースのうち1つを専修コースとして指定科目を中心に履修し、もうひとつを副専攻として選択するが、1年次の間についてはコースは未決定である。「情報メディア論」は、情報メディアに関する基礎知識を学ぶ概論であると同時に、高校で必修の「情報」科から大学の情報メディア学科の学びへの橋渡しとなる科目である。「情報」や「メディア」の理解に加え、デジタルコンテンツの基本的な仕組みも学ぶ。

今回の菊活用は、この授業内の「画像と映像」を扱った回で実施された。デジタル画像における標本化と量子化（高校で学習済み）について再度理解し、動画像における時間軸方向の離散化についても学んだ上で、4月に全員に配布された各自のiPadを利用して、菊を素材としたコマ撮りアニメーションを企画・制作した。また、撮影に利用した菊は、花の部分芝生上に配置して菊の花文字としてメッセージを表すパフォーマンスを実施した。

3.2 授業の様子

同日実施した2クラスとも、講義室における授業内で今回の菊の利用の経緯と社会的意義について簡単な説明を受け、アニメーション制作と花文字制作の担当を聞いたのち、各自のiPadでコマ撮りアニメーション制作アプリ「KOMAKOMA」を体験した。その後、建物（名古屋文理大学稲沢キャンパスFLOS館）の外に出て、学生ひとりあたり20本程度の茎のついた切り花の菊の束を受け取り、そのまま屋外で、各自が菊を素材にしたアニメーションを企画・撮影した（図4）。また、各自の作品が完成した学生から順に、あらかじめ担当が決められたカタカナの文字を菊花で表現するために、芝生上の指定場所でメッセージを表す文字となるように茎と葉を除いた花を置いた。

受講者がアニメーション作品を作る間に、SAである上級生に加え、映像制作等に興味のある上級生や複数の教員も参加して、アニメーション制作中の様子を360度動画で記録（図5a）したり、菊文字の製作過程をタイムラプス撮影（図5b）したり、出来上がった菊文字メッセージを小型ドローンを使って空撮（図5c）したりといった多様な撮影法で記録した。学生各自が作成したアニメーションについては各自のiPadに保存しておくだけでなく、後日、学生が自分の電子ポートフォリオ⁷⁾の



図4 屋外でのアニメーションと花文字制作の様子

1 ページにまとめて授業担当教員にも提出した。

3.3 学生アニメーション作品と花文字の展示

学生が作成したアニメーション作品には、菊の花だけでなく茎や葉を活用したり、人物や手の映像と組み合わせるなど工夫したものが多く見られ、「移動して円を描きながら花が増えていく」「マジックのように人の手に突然花が現れる」のようなトリック映像、「花がダンスを踊る」「花が散ったり元に戻ったりする」「菊が動物



(a) 360度カメラ（上）による VR 映像撮影



(b) 花文字の作成過程を iPhone でタイムラプス撮影



(c) 小型ドローン（写真左上）での空撮

図5 種々の記録撮影

のように動いて他の菊を捕食する」「茎が伸び縮みする」「つぼみが咲く」など演出を伴った表現作品や、「菊時計が時を刻む」「変化する文字や図形でメッセージを伝える」といった企画を表現したものなどバラエティに富んでおり、中には「花どうしが支えながらやがて立体的な造形として自立する」作品や「花がソーシャルディスタンスを保って移動する様子から祈りや希望の象徴に変化する」作品など、コロナ禍での思いを表現した映像作品



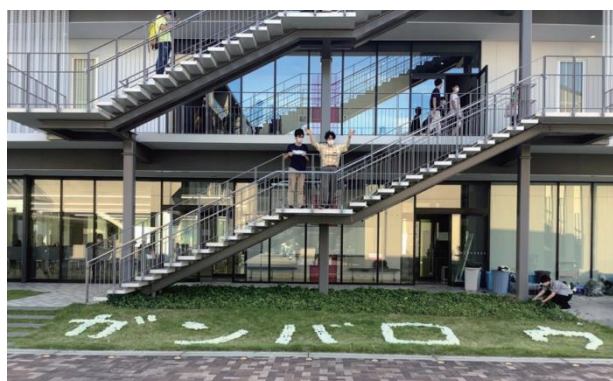
図6 学生によるコマ撮りアニメーション作品の一部

も見られた（図6）。なお、図6の写真は学生たちが提出した電子ポートフォリオ⁷⁾からの抜粋である。

学生各自がコマ撮りアニメーションを完成させた後、茎と葉は取り除いて花卉の部分をならべて花文字を作っ



(a) 菊文字を上空から見た様子



(b) 菊文字を地上から見た様子

図7 菊文字の展示

た。約10人で1文字を担当し、2クラスの合計約130人で、「コロナマケルナ」と「ガンバロウ」の13文字を完成した(図7a)。これらの菊文字は、授業後約1週間そのまま展示した。この間に、FLOS館を授業等で利用する学生や教職員、そしてFLOS館前を通りかかった人たちに、メッセージを届けた。FLOS館の外階段の上からメッセージを眺めたり、地上から花文字の写真を撮る姿も見られた。学内で偶然通りかかった人にメッセージを届けることができたと思われる(図7b)。

3.4 授業の結果と成果

「情報メディア論」では通常は、iPadを使った講義を実施しており、iPadでの作品制作やレポート課題などによるアクティブラーニングも取り入れているが、今回のような屋外で菊を使った実習は初めてである。加えて今年度は、1年生は入学後すぐに始まった前期の授業がいきなり初回から7週間にわたってオンライン(遠隔)授業となって、自宅からオンデマンドで動画を視聴し、iPadで課題や作品制作に取り組む日々が続く。対面授業がはじまった後も、ソーシャルディスタンスの確保と接触防止のため講義室では席を離れた座席指定で授業が行われたためグループワークや隣席の学生どうしの会話などもできない状況であった。本報告の授業は、菊を譲り受けたことを契機に急遽計画したものであったが、密室で密集することのない屋外で、周りの学生の様子を見たり、数人で協力したりしながらのアクティブラーニングが実現できたことは、願ってもないことであった。

今回は、90分の授業の中で「画像と映像」のデジタル化と、コロナ禍における菊の出荷困難の状況と教育での活用の意義、そしてiPadでのコマ撮りアニメーションの撮り方を知ってiPadで試し、さらに菊文字の計画と分担を把握してから、屋外での作業に移った。はじめは少し戸惑った学生もいたが、菊を受け取ると、映像作品のアイデアを考えたり試行錯誤したりしながら、受講者らは、熱心に取り組み、短い時間ながら図6に一部を示したような工夫を凝らした映像作品を制作した。時系列で静止画像を並べて撮影・上映すると動画(アニメーション)ができることを体験し、また、デジタル画像や文字フォントのように、点(菊花)の集まりで文字ができることも実感をもって体験した。

菊で文字を作成し終わった学生は、各自のポートフォリオに、次のような感想を記した。「文字が段々と出来上がっていく様は壮観でした。」「この作品を作ることで、みんなで協力するという団結が生まれたと思います。」

「はじめて話した人もあって、良い機会になりました。」「コロナの影響で経済が低迷し苦しんでいる人がたくさんいる中で、こうして花を使いメッセージを作れたことがとてもよかった。」「疲弊している社会に向けて元気が届けられることが良かった。」「自分も頑張っていかなければならないと思った。」

画像や映像制作の体験を意図した授業に、コロナ禍の背景をもった菊を利用した実習を取り入れたことで、単に映像の技術だけでなく、映像制作の意義やコンセプトを考えたり、社会とのつながりを考える機会となり、同時に学生どうしのつながりも強める結果となったと考えられる。

4. 菊受け入れの社会的意義と教育効果

譲り受けた菊を利用したことで、「フードコーディネート実習」、「情報メディア論」とも、例年の授業では体験できない内容の授業を実施できた。

保存可能期間が短く高価な生花をふんだんに利用でき、日本では通常は仏花として利用される菊を、学生の創作力や工夫によって全く異なる用途に利用したことで、日本以外の文化を含めて様々な食文化や映像表現について考察する機会にもなったと思われる。また、SDGsにもつながる社会の持続性に関連し、緊急支援策として地域に貢献する意義についても考える機会になったと思われる。

今回の体験は、学生たちが自分の作品を写真や映像で記録しており、繰り返し見たり、他人に説明したりすることで、授業後にも継続して学びを深める可能性がある。少なくとも、今回の授業に参加した学生たちは、いずれも貴重な体験をする機会に恵まれ、未曾有のコロナ禍の負の記憶とは別に、今回の授業体験を印象的に記憶に留めてくれるのではないかと信じる。

このように生花の教育利用価値と可能性は大きいと思われるが、今後、今回と同様に大量の生花が利用できる機会は多くないと思われる。今回の「フードコーディネート作品」や「菊のコマ撮りアニメーション作品」などは、写真や映像資料として今後も教育に活用したい。

5. おわりに

名古屋文理大学では、各学科の専門教育を実施する中で、地域社会への貢献も目指しており、今回の報告とは別に全学基礎科目「地域の課題」で愛知県稲沢市を中心とする地域の課題とその解決策を考える機会を持った。各学科の研究室(演習)やプロジェクト単位で、地

域と関わる研究テーマを複数実施している^{8),9)}。

本報告の事例は、コロナ禍における緊急支援策という側面をもつが、フードビジネス学科と情報メディア学科の双方で、授業の目的を印象的な体験によって通常の授業にまして効果的に達成し、同時に、地域社会や国際文化にも関心を持って、各自の創意工夫を凝らして体験するアクティブラーニングにつながったと考える。

今回の成果を後に引き継ぐとともに、今後とも学科間のコラボレーション、地域との関わり、社会的な応用などを視野に入れながら、各学科の教育目標に沿った効果的な教育を実践していきたい。

謝辞

本報告で利用した4000本余の菊は愛知県農業協同組合中央会（JA 愛知中央会）を通じて、県内菊生産者より提供頂いたものである。菊を教育現場で活用するという機会をいただいた関係各位に心より感謝の意を表します。また、大学内での活用に関して菊の受け取り・保管から処分にいたるまで大学の地域連携センターはじめ各部署の職員に多大なご協力をいただいた。さらに、受講生や授業担当者に加えて菊の扱いに関して支援いただいた上級生、教員、職員の皆様に深く感謝いたします。

注

- 1) 「平成30年生産農業所得統計」参照。
- 2) 愛知県ウェブサイト「新型コロナウイルス感染拡大に伴う県内農業者の経営支援について～「花き」や「つまもの」を利活用して暮らしに潤いと彩りを～」参照。
<https://www.pref.aichi.jp/site/covid19-aichi/kakitumamono.html> (最終閲覧 2020年10月21日)

参考文献

- 1) 長谷川聡、佐原理、長谷川旭、田川隆博、尾崎志津子：タブレット端末の教育利用—名古屋文理大学における iPad 導入：ヒューマンインタフェース学会誌，**12-4**, 245-252, (2010)。
- 2) 長谷川聡：デジタル情報文化と人間工学—AI・VR・3D・タブレット端末のヒューマンインタフェースと教育応用，情報文化学会誌，**25-1**, 3-10, (2018)。
- 3) 長谷川聡、小橋一秀、本多一彦、横田正恵、山住富也、田近一郎、吉田友敬、木村亮介、青山太郎、吉川遼、森博：情報メディア学科における iPad の教育利用—日本の大学初のタブレット端末導入からの8年，名古屋文理大学紀要，**19**, 63-70, (2019)。

- 4) 滝川和郎：管理栄養士養成課程での「iPad」利用教育の実践報告，名古屋文理大学紀要，**17**, 59-62, (2017)。
- 5) 谷口泉，食をトータルクリエイトするフードコーディネーター，杉山立志，中村麻理，木村亮介編著，フードビジネス学入門，三恵社，105-119, (2020)
- 6) 齋藤進編著，食品色彩の科学，幸書房，19, (1997)
- 7) 岩佐麻紀，太田典子，田積美枝子，田近一郎，小橋一秀，木村亮介，長谷川聡，山住富也，吉田友敬：電子ポートフォリオの作成・利用促進による大学生への就職支援，名古屋文理大学紀要，**17**, 25-31, (2017)。
- 8) 小橋一秀，杉山立志，長谷川聡：VR / AR による高大連携イベント—実施報告とVR / AR の効果—，名古屋文理大学紀要，**20**, 31-38, (2020)。
- 9) 深澤明利，田中明子，小橋一秀，高羽優希，木村亮介，長谷川聡：iPad 利用教育による大学の地域連携講座—子ども向け英語，プログラミング，コマ撮り動画作成教室—，名古屋文理大学紀要，**20**, 13-20, (2020)。